
Fate/ stay with murder

月影舞月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y w i t h m u r d e r

【Nコード】

N 6 5 0 8 Y

【作者名】

月影舞月

【あらすじ】

三年間。虚月識は『』と向き合っていた。それは無と言って無と言えず、有と言って有と言えないもの。形容するならばアカシックレコード。直訳するならば 死。三年の眠りから目覚めた虚月を待っていたのは、聖杯戦争という魔術師同士の闘いだっただ。

「僕が、今度こそ聖杯を破壊するよ 切嗣さん」
作者「原作風に設定を小出ししていくので、原作を知っている人からしたら煩わしいかも知れません。どうかご了承下さい。」

P r o j e c t (前 輩)

Prologue

ここは、どこだ。

僕の声が世界に反響する。けれど、周囲には何もなく、存在するものは無かった。

虚無に支配された空間。

無。

誰もいない、何も無い世界に　ただ一人、僕はぽつんと浮かんでいた。いったいいつから僕はここにいるのだろう。なぜこんなところに来たのだろう。それよりも、いったいどうやって？

何も無い世界。そこに存在するのは、よくわからない何か。暗くて、深く、冷たくて。それは嫌悪感を抱かせるものでありながら、どこか親しみを持てるものでもあった。

これが、死なのか？

わからない。解らない。判らない。僕には何も判別がつかず、ただ頭の中に流れこんでくる概念だけが僕の意識をつなぎとめていた。

これは、なんだ。

死。人々が世界にとどまれる時間を過ぎたときに、始まる、崩壊の始まり。

崩壊の終わりは　この、虚無に辿り着いた時だけだ。

十　十

「……ここは、どこだ？」

目が覚めた。見上げた天井は真っ白だった。手を動かそうとするとズキズキと痛み、体中、痛みでまったく動かせなかった。幸いにも痛みのない眼球だけを動かして周囲を見る。

僕の隣には、看護師さんがいた。彼女は横でじつと本を読んでい

た。
あの、と声をだそうとしたが喉がうまく動かない。最後に声を発したのはいつのことだったか。僕には昨日のこのように思えたが、あの虚無にいた時間が解らない以上、記憶が確かであるかどうか確信はなかった。

数十秒間、じつと見ていると目が合った。どんぐりのように丸い目を見開いて、大いに驚き、詠嘆した。

「先生、先生！　虚月>>こづき<<くんが目を覚ましました！」

彼女は本を床に放り投げて、丁度部屋に入ってきた先生に駆け寄った。先生は彼女より驚き、看護師さんと共に僕に歩み寄り、痛いところはないか、どこが悪いところはないかと聞いてきた。

「体を動かすと、全身が痛いです」と正直に言う。医者に嘘を言っても始まらない。

「そりゃ、君は運動していなかったからねえ。筋肉が剥離しかかっているのだろう。……しかし、他に悪いところはないのかい？」

医者は自分の言葉を一旦途切れさせ、僕の全身をまじまじと見る。それから、「もしないとしたらこれは奇跡だ。三年間も眠っていた少年が目覚めて何もなかったなんて前例がない！」

医者は大喜びだった。そんな嬉々とした表情を曇らせたくはなかったが、僕はどうしても聞きたくなくて尋ねざるを得なかった。

「あの、……先生」

「どうしたね？ 虚月くん」

「どうして、落書きがされているんですか？」

「……………落書き？」

先生は、途端に眉を顰めた。きよろきよろと周囲を見回して、「そんなものどこにもないじゃないか」と訝しげに答えた。けれど僕にはそれが信じられなくて、言わざるを得なかった。

「だって、ほら。先生にも、看護師さんにも、壁にも、ベッドにも……線や点がたくさん書かれているじゃないですか」

見ている、気味が悪い。こんなものをずっと見ていられない。見ていたら、僕はあの虚無の世界を思い出してしまう。今思うと、あれは濃厚な死の塊だったのだろうか。それとも、なんなのだろうか。感覚的には理解できたが、言葉に表すことができない。

それと同じだった。その「落書き」は一つ一つが脈動し、生命の躍動をありありと見せつけていた。特にその線の広がる中心である点は、命という概念を感じさせるほどだった。

医者は僕のそんな言葉を聞くと、「疲れているのだろう。今日はゆっくり休んで、明日また会おう。その時に詳しいことを聞いてあげるから」

そう言いながら、医者はゆっくりと僕から離れていった。手招きで看護師を呼び、歩きながら話をしているのが聞こえた。

「これは前例がある。確かX県の病院だったのだが、ある患者がそうだ、彼と同じくらいの年で、同じような症状を発したんだ。その子は退院後はちゃんとやって行っているそうだが、目覚めた当初は自分で自分の目を潰そうとまでしていた。

明日、その子の対処にあたった先生に来てもらうことにしよう。幸い、私は彼女の知り合いだからね」

「……その先生の名前は、なんというのですか？」

「蒼崎橙子という名前だよ。患者の方は、黒桐式。旧名は、両儀式だ」

Prologue (後書き)

さて、最初の説明パートは飛ばしていくよー！

Prologue second

僕が次に目覚めたときは、橙子さんが病室に入ってきた時の小さな足音が響いた時だった。いったい何年あっていないのだろうか、と思いながら上体を起こす。

今日は痛まない。なかなか回復しているじゃないか。

「おはようございます、橙子さん」

「おはよう、じゃない。……なんだ、起きられるのか。心配して損したじゃないか」

僕が起きたことに驚きながら、彼女はため息混じりに言う。

この人が僕を心配していた？ ……馬鹿な。

そう思いながら、橙子さんの表情が真剣そのものだったことに気づき、本当に心配してくれていたことが嬉しかった。最後にあつたのが……僕の感覚では二年前だが、実際には五年も経っている。彼女にとってそれは長い時間だったのだろうか、と思いながら、足音まで覚えた彼女を見た。

とても綺麗な人だ。赤い長髪はポニーテールにされている。いつもは眼鏡をかけているのだが、今日はかけていなかった。いつもどおり、アイロンをかけたようにパリっとしているシャツにジーンズという格好で現れた橙子さんは、医者というよりもビジネスウーマ

ンに思えた。その美貌は、昔のままだった。

その全身に、落書きされたかのような線を引かれて。

開け放たれていた病室の窓から冷たい風が入り込む。ひゅう、と音を立ててそれは僕と橙子さんの間を通り抜けた。寒いな、といいながら橙子さんは窓を閉じる。その動作をしながら、彼女は僕に「お前のその”眼”さえなんとかなったら、お前は今日中に退院できるそうだ」と言った。

「へえ、随分早いんですね。式さんは一週間位必要だったらしいですけど」

僕が口にした式という人物は、僕の従姉>>いとこ<<だ。いつも着物をきている、どこか割れ物じみた壊れやすさを感じさせる女性だ。昔は両儀という名前だったが、今では結婚して黒桐という苗字に変わっている。といっても、僕が知っているのは両儀式ではなく、黒桐式だけだが。

僕の識る両儀式という女性は、僕の従兄にあたる黒桐幹也さんから聞かされている想い出話の中の人物だ。僕が魔術などを知っているということを知っては、聞かされることのなかった彼女の戦いなども少しは耳にすることが出来た。

最終的に、全て惚気話に変わってしまうのだが。

「おまえは何故か知らんが筋肉が全く衰えてなかったし、寝てる間に剥離しかかっていた筋肉がもうくっつきやがったからな。医者からすれば奇跡といったところだが、まあお前の知る式の件もあるしな。私は驚かないがな」

ふふん、と彼女は鼻を鳴らす。けれどそれを言ったあとで、僕は苦笑した。

「じゃ、なんでその式さんと幹也さんを連れてきているんですか？」

僕はちらと病室の入口を見る。そこから、赤い着物の袖が覗いていた。それと、黒い外套の端が。

バレてたか、といって黒い外套の主　黒桐幹也さんが僕の前に姿を現す。以前あった時とあまり変わらない感じで、上下が黒一色の服装で統一されていた。おそらく彼は黒っぽい服しか纏わないのだろう。

「ほら、式。せっかく従弟>>いとこ<<にあっただから顔くらい見せたらいいじゃないか」

「……まあ、そうだな」

そう言って、式さんは幹也さんに手を引かれて病室に足を踏み入れた。老いを感じさせない瑞々しい純白の肌と、それと対照的な真っ黒な髪。瞳は墨を流し込んだような、美しい黒をしていた。

珍しく、赤いジャケットを着ていない。見れば今日は裏地のあるちゃんとした着物だった。着替えだけで何分使ったのだろう。

旧知の人物と立て続けに再開すると、感動も若干薄いものとなる。だが彼らが僕のために遠路はるばる着てくれたのだと思うと自然と表情がほころんだ。けれど式さんは僕に再会の挨拶の一つもよこさずに、その黒い瞳で僕を見据えている。

「なあ、シキ。 おまえ、何が視えている？」

唐突に、彼女は言った。その言葉に掛けられた圧力を感じ、僕は医者に言ったように線と点が見えるということを話した。すると、それだけで橙子さんと幹也さんの表情が曇る。……なにか良くないのだろうか。それとも、別の原因なのだろうか。

思えば、なんの理由もなく橙子さんがこの二人を連れてきたことではない。つまり、橙子さんは僕のこの”眼”がなんなのか、検討が
ついているのだろう。

そしておそらく、解決策も。

「……シキ。 お前が見ているのは」

「死」と式さんの言葉を遮って僕は答えた。「あの、真つ暗な中で僕はずっとあれと向かい合ってきたからね。ああ、あの気持ちは多分一生忘れられないよ。僕は あそこには戻りたくないと思いつながら、あそこに戻りたいと願っているんだから」

僕のこの言葉を聞くと、橙子さんと幹也さんはもつと暗い顔をした。それと対照的に、式さんは無表情のままだ。

そして、間を開けて彼女は言った。

「お前の見たものは、私の見たものと同じだ」

Prologue third

式さんは、僕にすべてを話した。

そして、僕はこの目がなんなのかを知った。

直死の魔眼。物事の終わりを見ることでできる魔眼の一つ。それの保有者は、この世界を見渡しても僕含め三人しかいないらしい。

ひとりは、僕。

ひとりは、両儀式。

ひとりは、遠野志貴。

最後のひとりは失踪して今では所在不明になっているらしいが、最後の目撃情報は倫敦でかの真祖の姫と共にいたらしい。聖堂教会の情報だそうだ。

僕には魔術が使えないが、有名な退魔の家系に生まれたため、色々な所に名前は知れ渡っている。僕の家系はそちら側にはかなり名の知れた家である。両儀の家とはかなり昔から親戚づきあいをしているんだとか。

そして、その一人息子の跡取り。七夜に並ぶ退魔の家系なのだから、注目されて当然であった。魔術協会、聖堂教会、アトラス院……有名所はもとより、小規模な魔術結社などにも「虚月」の名前は知られていた。それで僕は蒼崎橙子さんと出会ったのだが、これ

は余談でしかない。

とにかく、式さんは眼を制御することに成功。ただそれまでは「魔眼殺し」の眼鏡を掛けていたそう。それも一時的で、すぐにやめたそうだが。

僕の魔眼の症状は遠野の息子よりも式さんのほうに似ているらしい。また、橙子さんの話によると「根源のどこかとラインが繋がってしまった」ということらしいが、それも含めて僕の身体的特徴は式さんに似ているのだ。血も繋がっているし、それを含めて式さんに教えを乞おうと思った。

「式さん、この眼の制御法、教えてくれますか？」

話を終えてあまり間を開けずに言葉を発した僕に対して、式さんは驚きを禁じ得無かったようだ。いつもは絶対に見せない困惑の表情を僕に向けながら、「おまえ、怖くないのか」と聞いてきた。

「怖くないと言ったら嘘ですけど、それよりも目先の問題を解決する方が先です。いい加減、この線だらけの世界にも飽き飽きしてきましたから」

「飽きた……か」

彼女はそう言うと、どこか儂げに笑った。その瞳は、慈愛に満ちたものにみえた。

まるで、同類を見るかのような

制御法の殆どを教えてもらったが、ほとんどが感覚的なことだったので、僕は自力で制御することに決めた。

「それじゃあ私は、お前がもう退院しても大丈夫だということを書いてくる。それまで黒桐が持っている眼鏡をつけておけ。それが魔眼殺しだ。なんならやるぞ」

いっぺんに全て言うてから、橙子さんは部屋をでた。シーツの下から足を伸ばし、ベッドから以前と変わった様子もない足を抜く。その足で、恐る恐る地面を踏む。

痛みはない。僕はすでに動ける状況にあるようだ。そんな僕を見て、「オレの時は一週間も動けなかったのに」と呟いたため、僕は苦笑を漏らさざるを得なかった。ひんやりとした床の上を裸足のまま歩き、幹也さんから眼鏡をもらい、それを掛ける。

途端、線は消えた。ああ、これで少しの間は安心だ。そう思いながら僕はふとした疑問を彼らに言う。

「えっと、式さんと幹也さんはどこに泊まるんですか？」

「ああ、オレたちはホテルをとってある。……ま、橙子は自分でどうにかするだろう」

「っていうことは、橙子さんは泊まる場所がないんですね。今のところ」

それさえ解ればいいのだ。と思いながら僕はベッドに腰掛けた。僕の質問の真意が解らないようで、彼らは二人して首をかしげてい

た。

式さんから制御の方法を教わり終えた頃に、医者が来て言うには退院して良いそうだ。僕が当時着ていた藍染めの浴衣を受け取り、式さんと橙子さんに病室を出てもらってから着替えを済ませる。すでにひとりで着替が済ませられるほどに回復していて、案外これから先苦労はしないかもしれない、と思った。

式さんと幹也さんは病院に近いホテルだそうだから、退院してからすぐに別れた。それから、橙子さんに宿を尋ねた。

「え？……泊めてくれないのか」

まるで当たり前のことを要求するかのようには橙子さんはいった。もとよりこちらもそのつもりだったので二つ返事で承知した。恩は恩で返すのが礼儀というものだろう。僕は橙子さんの車に乗せてもらって、三年ぶりに自分の家に向かうことになった。

三年ぶりと言っても感覚的には一日ぶりである。変化していないことを望んでいたとき、ふと橙子さんが思い出したかのように僕に笑いかけた。「それにしても、君も隅に置けないな」

「え？」

いったいなんのことを話しているのだろうか、と思い僕は間抜けた返事をする。

「見舞い客だよ。どうやら毎日来ているようだよ。名前は　なん

て言ったかな、遠坂、だつたっけ」

橙子さんはハンドルを切りながら答えた。このルートだと深山町へと進行している。だんだんと見慣れた街並みになってきた。遠坂、という名前を聞いて十字路を右に曲がった先にある真つ赤な屋敷を思い出しながら僕は驚愕した。

「遠坂、つて遠坂凜ですか？」

「そう、その娘だ。毎日毎日、自分の時間を惜しんできているようじゃないか。なんだ、恋人か？」

「いえ、そんなわけじゃあないはずなんです、けど……」

遠坂さんには以前お世話をしたことがある。言峰教会の神父からの頼みで、僕が稽古をつけてあげたのだ。あの少女は今どうしているのだろうか、と思いながら僕は動く景色を眺めていた。

しばらくして、十字路に出た。ここから坂を登ると西洋屋敷が立ち並ぶ町並みへとなり、左へ曲がると和風の家が立ち並ぶ町並みになる。そういえば、僕の隣に住んでいた土郎君は今頃どうしているだろうか。そうすると、今まで僕に出会ってきた人物の顔が次々と思い出され、今頃どうしているのだろうかという、なんともいえない気持ちになった。

「……そういえば、識。お前、一人で暮らせるのか？」

「ああ……そういえば、両親はもういませんでしたね。まあ、経験はありませんけど……いざとなったらお隣さんに助けを求めますよ」

笑いながらそういう。土郎君は料理がとても得意で、彼の父衛宮切嗣をいつも満足させていた。切嗣さんはが死んだのと同じ時期に僕の両親も死んだのだったと思ひ出した。ということは、彼が居候を連れてきていない限りあの家で今でも一人暮らしを続けているのだろう。

僕と違って人徳のある子だから大丈夫だと思つが。

「まあ、無理はするなよ。なんなら一週間位お前のところにてやろうか。寂しいだろう?」

「大変嬉しいですけどお断りします。僕はこう見えてけだものですよ」

からかうように僕は言ったが、橙子さんは「それを承知のうえだ」ときっぱりと言った。驚いたが、明日には帰ってもらうことにした。

十 十

自宅にたどり着いたあとのことは特に何もなかった。あつたとして、橙子さんが今晚中に帰ると言い出したくらいだ。だから僕は眼鏡を貰つていいかということ聞き、それについて承知されてからももろの件に関してお礼を述べた。橙子さんは、「よせよせ」といって煙を払うように顔の前で手を振つたがまんざらでもなさそうだった。

そののち、橙子さんと別れ、僕は就寝した。

明日からは学校があるのだろうか、と思ひながら。

直死の魔眼 / ? chapter one

青年のナイフが素早く動く。対立する鬼のような大男の体に無数の切り傷が刻まれる。それに対して男は、拳に煉獄を纏わせて拳を繰り出す。それをすべて避け、目にも留まらぬ動きで辺りを高速移動し、その度に敵の体には傷がつけられる。

まるで、蜘蛛のようだと思った。

大男は、倒れない。ある時は灼熱を生み出し、ある時は青年を焔のまとった拳で殴り、その光景は、炎鬼>>えんき<<という鬼を思い出させた。

彼らは、殺しあう。

殺し合って、殺し合って、殺し合って

最後に、大男の腕が青年の心臓を穿つ寸前 青年のナイフが敵の頸動脈を断ち切った。

敵は、白い粒子となって散っていく。青年はそれを見ながら、悪鬼のような表情で言った。

「また消えるのか 紅赤朱、あの夜のように、オレの前から姿を消すのか！」

その叫びが響き渡ったときには、青年もあの炎鬼のように光の粒子となって消えていた。

はっ、と目が覚めた。重たい瞼をこすりながら僕は布団から抜け出し、朝食を作ろうかと思いつき台所に向かう。清々しい冷気が僕の眠気を吹き飛ばしてくれたおかげで、今日一日は動き回れそうだ、と思った。小鳥の囀りを聞きながら、僕は台所に立つ。

別れ際に、式さんに渡されたナイフ。これを一体どうしようかと思いつきながら台所の前に立つ。

……けれど、料理を作るやる気が起きない。よく考えたら食材がないじゃないか。溜息を付いて、土郎君のご厄介になりますかと腹を決めた。土下座でも何でもしてやるうではないか。

半ば自棄々々やけ々々になりながら、僕は自室へと戻り、制服に着替えた。穂群原高等学校の制服であるベージュ色の学ランとズボンを身にまとって僕は戸締りをし、お隣さん 衛宮士郎の家へと出かけていった。

もちろん、式さんからもらったナイフは忘れなかった。

徒歩五秒。とりあえず大きな門を叩くが、誰も出る気配がない。

「……よくよく考えたら、ここの屋敷は広すぎて誰も出るはずがないじゃないか」

笑って、僕は黙って中へと足を踏み入れた。

「わああああああああああああああああああ！ その人、避けてえええええええええええええええええつ！！」

女性特有の甲高い声が、バイクの音と共に聞こえてきた。振り向くと、そこにいるのはバイクに乗ったボーイツシユな天然教師

「藤村先生、なにしてんですか!？」

僕は慌てて半歩下がってバイクを躲すと、すぐにそれに飛び乗った。自然、藤村先生の後ろから覆いかぶさるような格好になる。

「きゃっ！ ちょ、ちょつと君！」 「先生はちょつと黙ってて！ ブレーキが解らないんですか、アクセルを踏まないでください右折しようとしなくてください！」

僕の言葉に鬼気迫る者を感じ取ったのか先生は静かにして、アクセルから足を外してくれた。僕はブレーキを掛け、ゴムの擦れる音を響かせながら止まるうとするバイクから足を伸ばし、スパイクの踵で地面を削りながら失速の手伝いをした。

バイクが止まり、そこでようやく僕は藤村先生から身を離し、地面に足を付いた。安堵の溜息をつく。

「……藤村先生、何をしたらこうなるんですか」

「え、つと、あの、」

「先生はいつもこうでしょう。衛宮の機械類を触るなど言ったら触るし、あいつの修理の邪魔はするかと思ったら僕の料理まで邪魔し

たりして、構って欲しいのはわかりますけれど」

「あの！ どちらさまですかっ！」

僕の話を遮って、先生は大声を上げた。その様子には僕は驚き、もしや解っていないのだろうかと思った。昨日鏡で顔を見たが、三年前と変わったところはなかった（はずだ）。それとももしかして、もう人の事を忘れているのだろうか。

「忘れたんですか？ 貴方の大好きな弟分の、虚月識ですよ。タイガーなのに鳥頭ですか」

僕がそれを言ったときには、背後に土郎君と、もう一人誰かがいた。時刻は午前六時四十五分。土郎が起きていても不思議ではない時間帯だ。

そんなことを思っていたから、僕は藤村先生の様子が全く解っていないかった。

「 識！ もう、死んだかと思ってたじゃない！！」

先程の三倍ほどの声を上げて、先生は僕に飛びついた。ジャンピング抱きつきである。あまりにも唐突で全体重をこちらにかけてきたため、僕は為す術も無く藤村先生に押し倒される。ぐっ、とうめき声を漏らしたが、先生の耳には届かない。

「三年よ三年！ もう、あの事故で倒れたあと、私がどれだけ心配したと思ってるのよ！」

「あの、せんせ」

「いいわ、タイガー扱ひも許す！ ええーい酒持ってこーい！ 識が帰ってきたぞー！！！！」

まず落ち着いてくれ。僕はそう思いながら、僕を見下ろしている士郎君を見る。その件の士郎君は僕に頬擦りまでしている藤村先生の様子にあっけに取られた様子もなく、ただ僕を見つめていた。隣に立つ紫髪の少女も同様である。

「 識兄>>シキにいく！？ いつ退院したんだよ！」

「 士郎くん頼む、こいつどけて！」

藤村先生に押し倒された状態の僕を見て目を丸くする彼に、僕は必死の思いで頼み込んだ。

直死の魔眼 / ? chapter one (後書き)

ご都合主義っぽいなー。
下手だね、どうも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6508y/>

Fate/ stay with murder

2011年11月22日01時14分発行